

二〇二三年度 入学試験問題

国 語

第二回

【注 意】

- ・ 試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・ 問題は一ページから八ページまでです。
- ・ 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- ・ 字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・ 記号・句読点がある場合は字数に含みます。
- ・ 解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章は、「正しさ」について筆者が述べたものです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

多くの社会ではルールを正当化する手続きが定められています。この手続きに従って定められたことは「正しい」のだとされます。そして、その手続きはそれぞれの社会や国ごとに定められており、手続きを実行するための機関があります。さらに、決められたルールを人々に強制するための機関も備えています。

こうしたことから、「正しさは社会により異なる」とか「国により異なる」と言いたくなるかもしれませんが。しかし、そうした差異も、理解不能なほどに多様なものではないのが通常です。実際問題として、現在では民主的な価値観や基本的人権が世界的に「正しい」と認められているため、多くの国の法律の内容はそれほどかけ離れたものにはなっておらず、**A** 女性の参政権はごく一部の例外を除いてほとんどの国で認められています。もちろん、各国がまったく同じ法律体系になっているわけではありませんが、私たちにとって理解不可能なほど奇妙な法律体系になっていることはないと思っても、それほど誤りではありません。

たとえば、⁽¹⁾ 私たちは海外旅行に行くときに、行き先の国の刑法体系について調べておくなどということはしなないでしょう。自分の国で犯罪になることを行き先の国でもしないようにすれば十分です。自分がよかれと思っ てやったことがその国では犯罪になるなどということはまずありません。行った先の礼儀作法に反するふるまいを知らずにしてしまうことはあるかもしれませんが、たいていの場合、知らずにやったことはそれほど責められないことも、普遍的ですし、礼儀作法などの慣習が文化によって異なることと自体がおおむね普遍的に認識されています。

「正しさは社会や国により異なる」などと「トナえるまえに、むしろ考えなければならぬことは、**(2)**」についてです。

倫理学の授業をしていると時々、日本の旧優生保護法やナチスによるユダヤ人虐殺について、「その時代では正しいことだったのだ」などと発言する学生さんがいて、仰天します。たしかにいずれの場合も、当時の「ルールを正当化する手続き」にのっとって法律として定められたものです。しかし、だからといって、「それらは正しかったのだ」と即断してよいもの でしょうか。とはいっても、正しさは文化によって異なるという文化相対

主義の立場からは、そうした発言に反論することは困難です。生徒からそのように言われて、おかしいとは思いつつ、十分に反論や議論ができなかった中学や高校の先生も多いのではないのでしょうか。

しかし、考えてみましょう。障害があるなどの理由で、不妊手術を受けさせられた人たちは、優生保護法に合意していたのでしょうか。虐殺されたユダヤ人たちは、虐殺されることに合意していたのでしょうか。まさか。かれらがそんな目にあわされたのは、まさしく暴力による強制でした。⁽³⁾ 「正しさ」は、ある行為に複数の人間が関わるときに、その人たちの間で合意が形成されることで成立します。当事者が関わりたくないところで勝手に決められたルールを強制することは、それ自体として不正です。このように考えると、これらの法律は「ルールを正当化する手続きの正しさ」を満たしておらず、やはり不正だったといえるべきでしょう。

女性を劣位に扱う戦前の日本の民法や選挙法についても同じことが言えます。それらの法律は帝国議会によって制定されましたが、戦前の日本では女性に参政権はありませんでしたから、議会の代表者はみな男性でした。**B**、女性を劣位に置く法律は女性のいないところで勝手に決められたのです。

C、全国民が一致して合意するなどということは現実的に困難です。そこで、現在のほとんどの国では代議制民主主義が採用されています。この制度では、議員が普通選挙で選ばれる限りは、法律に従う立場の人たちの代表者が法律を制定していることとなります。その点で、代議制民主主義には一定の正当性があるといえるでしょう。

D、議会での議論は公開されていますから、議員以外の一般市民はその様子を見聞きして、納得できるものかどうかを判断することができます。そして、納得できない主張をした議員を次の選挙で落選させることもできます。

江戸時代の日本やその他の多くの国において、かつて法律は、権力者が一方的に定めてそれに従うことを暴力で強制するものでした。あまりに人々の立場を無視した法律は大きな反感を買うでしょうから、それなりに配慮したかもしれませんが、その場合でも人々の意見を直接聞いたわけではなく、権力者側が勝手に「スイソク」したただけだったでしょう。そしてそもそも、そうした権力者の権力自体が、支配される側の人々の合意によって正当化されたのではなく、暴力（武力）によって獲得されたものです。

そうした⁽⁴⁾あからさまに暴力的な手続きよりは、代議制民主主義の手続きは
はいぶんマシなものではありません。しかしやはり、代表されていない立
場の人たちも多数います。それどころか、議会においてさえ、代表者全員
が納得して合意するまで話し合われないうちに、強行採決によって可決さ
れることがままあります。そのようにして定められた法律を無造作に「正
しい」と見なすことは、合意していないままに従わされる人たちへの暴力
を無造作に肯定^{こうてい}することになります。

もちろん、自分が納得しない法律には従わなくてよいということにはな
りません。しかし、納得できない法律は批判し、その改正を求めていくこ
とはできます。また、⁽⁵⁾ある法律が含んでいる暴力に自分自身では気づけな
くても、それに苦しめられている人の声を聞いて気づくこともあります。
そうして気づいてしまったときには、たとえ他国のことや昔のことであつ
たとしても、「正しさ」を問い返し、「より正しい正しさ」を実現するよう
に努力していくべきでしょう。

「正しさは人それぞれ」と並んで最近よく聞く言葉に、「絶対正しいこと
なんてない」とか「何が正しいかなんて誰にも決められない」などとい
うのがあります。これらの言葉を言う人たちは、どうやら「ちょっと気の利
いた、よいことを言っている」と思っているようなのですが、私はこうし
た言葉を聞くたびに、⁽⁷⁾セズジが寒くなります。こうした言葉は、より正しい
ことを求めていく努力をはじめから放棄^{ほうき}する態度を示しているように思わ
れるからです。そして、こうした言葉を吐く人たちは、たとえば私が何も
悪いことをしていないのにガス室に送られそうなとき、決して助けしてく
れないだろうと思うからです。

どんなに話し合っても、国民全員が、さらには人類全員が合意すること
はないかもしれません。たとえいま生きている人たち全員が合意したとし
ても、まだ生まれていない人は合意していません。その意味では、「絶対正
しいことなんてない」のかもしれない。しかし、「より正しい正しさ」は
あります。一方的に決めたルールを暴力によって強制するよりは、話し合っ
てお互いに納得して決めていく方が正しいですし、これまで正しいと思わ
れていたことに対して、その不正を⁽⁶⁾コクハツする人たちの声が聞き入れら
れ、改正されたときには、より正しいものになっているでしょう。そうやっ
て、たとえば女性の権利が認められてきたわけです。

もちろん、「不正のコクハツ」それ自体が不正なものである場合もあるで

しょう。自分が悪いのに、それを認めずに他人のせいにする人もいます。
そうしたとき、相手を尊重するとは、単に相手の言い分を丸呑みすること
ではありません。納得できないことを言っているのに「人それぞれ」といっ
てきちんと反論しないのは、相手を尊重するどころかバカにすることです。
まずは相手の言い分をよく聞き、それがもつともだと思えば従い、おかし
いと思えば指摘し、相手の再度の言い分を聞く。それを繰り返すことで、
お互いに納得のできる合意点を作り上げていく。これが、正しさを作っ
ていくための正しい手続きといえるべきでしょう。そうした手続きによって、
より正しい正しさを実現するよう努力していくことが大切です。

私が「人それぞれ」という言葉にこだわるのは、そうした努力をしない
で済ませる態度を、⁽⁷⁾ジョチヨウウするからです。もちろん、趣味や好みなど、
他人と同じにしないでとくに問題ないようなことについては「人それぞ
れ」でけっこうなのですが、そうでないこと、他人を巻き込むことについ
ては「人それぞれ」で済ませるわけにはいきません。他人と合意を作っ
ていかなければならないことについて、「人それぞれ」などといって十分に話
し合う努力をしないしていると、社会は⁽⁶⁾分断されてしまいます。分断され
た社会で何かを決めようとすれば、結局のところ暴力に頼るしかなくなっ
てしまいます。

(山口裕之『みんな違ってみんないい』のか？ 相対主義と普遍主義の問題)

★普遍的……………広く行き渡っていて共通するところがある様子。

★日本の旧優生保護法…一九四八年〜一九九六年まで存在した法律。不良な
子孫の出生を防止することなどを目的とした。

★ナチスによるユダヤ人虐殺…第二次大戦中、ナチス・ドイツがおこなったユダ
ヤ人絶滅政策のこと。およそ六〇〇万人のユダヤ
人が虐殺された。

★文化相対主義……………ここでは、すべての文化の価値は尊重されるとも

★不妊手術……………に優劣をつけることはできないとする考え方のこと。
妊娠を不可能にする外科的手術のこと。

★民法……………財産や身分や人格などの権利に関する法の総称。

★分断……………ひとまとまりのものを切れ切れにすること。

問一 — (1)「私たちは海外旅行に行くときに、行き先の国の刑法体系について調べておくなどということはしないでしよう。」とありますが、その理由を二行以内で説明しなさい。

問二 — (2) に入る表現を本文から十五字以上二十字以内で抜き出しなさい。句読点や記号は含みません。

問三 — (3)『正しさ』は、ある行為に複数の人間が関わるときに、その人たちの間で合意が形成されることで成立します。」とありますが、これはどういうことですか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「正しさ」は、文化の特徴を取り上げて皆で議論し、お互いを尊重しながらすべてを認めているかによって決まるということ。

イ 「正しさ」は、そのルールの影響を受ける人たちの間で十分な話し合いがおこなわれ、皆が納得できるかによって決まるということ。

ウ 「正しさ」は、これまで大多数の人たちが合意してきた行動のルールに従い、自分自身の行動や生活態度によって決まるということ。

エ 「正しさ」は、議会がある法律を定めるとき、代表者たちの意志に基づくか、権力者による強制であるかによって決まるということ。

問四 — A Dに入れる語を次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用しなさい。)

ア それに イ つまり
ウ たとえば エ もちろん

問五 — (4)「あからさまに暴力的な手続き」とありますが、誰がどうすることですか。解答らんに行で説明しなさい。

問六 — (5)「ある法律が含まれている暴力」とありますが、ここでの「暴力」とはどういうことですか。二行以内で説明しなさい。

問七 — (6)「分断された社会」とありますが、そのようにならないために私たちがすべきことはどういうことですか。三行以内で説明しなさい。

問八 — (ア)～(オ)のカタカナを漢字に直しなさい。

問九 — 本文の内容に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 正しさは文化によって異なるという文化相対主義の考え方には反論できない場合が多く、より正しいことを求めていく努力を断念させる方向へ導かれてしまう。

イ 国や社会の中で決められる法律は、その手続きにおいて十分な話し合いによる合意が形成されおらず、自分が納得できないものであれば、従わなくてよい。

ウ これまで正しいと思われることに対して反論する場合、お互いに話し合いを重ねながら複数の間でよりよい正しさを作り上げていくように進めるのがよい。

エ 何が正しいかは誰にも決められないという言葉は、どんなに話し合っても全人類が合意に達することはないと真理をふまえたもので、十分説得力がある。

【2】次の文章は、辻みゆき『家族セッション』の一節です。「本文までのあらすじ」を読んだ後、本文を読んで、後の問いに答えなさい。

【本文までのあらすじ】

桜木千鈴、門倉姫乃、一条菜種は中学一年生。あるとき三人は、それぞれの家族から重大な事実を宣告される。出生時に病院内で新生児すり替え事件に巻き込まれ、本当は、千鈴は一条家（菜種の家族）、姫乃は桜木家（千鈴の家族）、菜種は門倉家（姫乃の家族）の子であったことがわかった。そしてそれぞれの家族が弁護士を交えて集まって議論した末、いずれは本来の家族に戻ることを決める。親たちは子どもたちに新しい家族に慣れてもらおうと「ホームステイ」と名付けて週に一回、「お泊り」を実施することになった。「ホームステイ」は順調に続き、それぞれの温かい家族に迎えられながらも、やはり納得できない三人は、大人たちの計画を絶対阻止しようと真剣に話し合っていた。

いろんなところへ行った。二泊、三泊のホームステイもしたし、ひとつひとつの家に、三人いっしょに、順番で泊まって回ったりもした。

誰が、どの家か——そんなことが関係なくなるくらい、行ったり来たりした。

とても楽しかった。日にちと曜日の感覚が薄れていくくらいに、無我夢中の毎日だった。

そんな日々の中で、三人はそれぞれに、

A

思うことがあった。

最初は、すぐに忘れてしまうこと。いや、忘れてしまおうとすること。だけど、やっぱり忘れられないこと。たまり続けたものは、いつかはあふれだす。

八月二十日を二日後に控えた、八月十八日、三人はとうとう、よどんでいた気持ちをぶつけあうことになってしまった。

きっかけは、三人で門倉家に泊まったときの、ささいなひと言だった。

夜通しおしゃべりした、次の日。三人でショッピングモールに出かけよ

うとしていた、その、出がけのことだった。

「じゃあ、行ってくるね」

姫乃がそう言い、

「お世話になりました」

千鈴と菜種は、その場にいた、ママとヒロ子にあいさつをした。

「また遊びに来てね」

笑顔でそう言うママの横で、

「外でも、きちんとなさいね」

ヒロ子は、そう言った。

「門倉の娘なんだから」

濃く短い自分の影を見ながら、三人は黙々と歩いていった。

日差しは B 容赦なく照りつけてくるけれど、この暑さで人影もなく、不思議な静けさを味わって味もいる。

門倉家からショッピングモールへ行くにはバスに乗るのだが、そのバス停まで、最短距離で五分ほど。けれど姫乃は、その最短ルートではなく、もつと静かな裏道を選んだので、千鈴と菜種も、黙って、それに従った。途中で公園にさしかかる。

「ちよつと、こつち」

そう言うと、姫乃は公園へと足を向けた。

誰もいない真夏の公園は、蟬たちの天下だ。

わしやわしやと聞こえる、ひとかたまりの蟬時雨の中から、耳が勝手に

声を拾う。

ミン、ミン、ミン、ミン、ミン……。

ツクツクオーシ、ツクツクオーシ、オーシツクツク、オーシツクツク

……。

姫乃は、大きな木のかげを選んで、立ち止まった。

「家を出てから、ずっと気になってることがあるんだけど」

蟬たちの声に負けないように、姫乃は言った。

「さっき『門倉の娘なんだから』って言ったとき……、ヒロ子さん、わたしじゃなくて、菜種に言ってたよね？」

あのとき——、姫乃と菜種は、千鈴を真ん中にして左右に分かれていた。ヒロ子は、あきらかに、菜種のほうに顔を向けて、そう言っていた。

「菜種。ヒロ子さんから『門倉の娘』って言われてるの?」

「……言われてる」

大音声の蟬時雨の中、菜種は、やっとのこと、そう答えた。

「いつから?」

「門倉家に、はじめて行ったときから」

「そんなに前から?!」

姫乃の声に、非難めいた響きがまざる。

「なんで言ってくれなかったの?」

「言ったら、大きすぎになるだけじゃない」

菜種の顔にも、C 不満の色が表れていく。

「もういいじゃん。八月二十日過ぎたら、終わる話なんだから」

千鈴は話をおしまいにするつもりでそう言ったけど、姫乃にとっては、そうはいかない。

「わたし、前から思ってた。菜種って、ずるい。テストでこっそりいい点とったり、大地のことを黙ってたり。どの家に行っても、D 手伝い

してるし。自分のことは黙ってて、周りには、めいっばい点数稼ぎ。そんなに、パパとママに気に入られたいの?」

わしゃわしゃとした蟬の声は、まるで姫乃の味方をするようにすごい迫力でせまってくる。

「もしかして、わたしの代わりに、うちの子になりたくなかった?」

挑発するように言う姫乃に、菜種は抵抗した。

「バカなこと言わないで。やるべきことをやってるだけ。点数稼ぎなんてしてない」

「してるって。ねえ、千鈴もそう思うでしょ? 菜種はずるいって」

「え……」

「ずるくない」と、千鈴は思う。たぶん菜種にとっては、ごくふつうのことなのだ。そんな言いがかりをつけるひまがあったら、姫乃も、少しは菜種を見習って、勉強や手伝いをすればいい。

でも……、姫乃の気持ちもわかる。なんでもできる菜種は、ずるい。自分の心のどこか、のぞいてはいけないどこかで、そういう声が聞こえてくる。

「ああ、そう」

「姫乃は、千鈴の一瞬の沈黙を、否定だと受け取ったようで、冷ややかに

80

75

70

65

60

55

50

そう言った。

「そういえば、千鈴もずるいもんね。大地のこと好きじゃないって言いながら、いつのまにか仲よくなってるし」

「なんでそうなるのよ」

千鈴は怒った。たしかに、ホームステイをするようになってから、大地とは仲よくなったけど、姫乃が勘ぐっているような気持ちではない。今のところは。

「わたし、ずるくない」

「わたしだけ、ずるくない——千鈴は、本当はそう言いたかった。」

ところが。ところが、だ。

「わたしも、千鈴ちゃんって、ずるいと思う」

なんと、そう言ったのは菜種だった。

蟬時雨の中の一匹が、ジッと鳴き終わり、別の一匹が、ミン……と、鳴き始める。

「菜種?」

「わかってる。千鈴ちゃんは、いい子だし、ちっとも、ずるくない。でも……思うか、思わないかって言われたら、わたしはずるいと思う」

「あははっ」

おもしろくなってきたと言わんばかりに、姫乃が笑う。

「なんで? ずるいものにも、わたし、一条家でなんにもしてない。素麵すら、まともにゆでられなくて……」

「そこが、ずるいんだってば」

菜種は、めずらしくイライラしたようにそう言った。

「千鈴ちゃんは、なにもできない。岳とユージに迷惑かけて、春馬とケンカして。それなのに……、すぐちゃんって呼ばれて、岳にやさしくしてもらって、春馬とは、なんだかんだ言って仲よくして、口下手のユージから音楽を教えてもらって、ちゃっかり大地とまで仲よくなって。千鈴ちゃん、なんなのって思う」

「なんなのって、言われても……」

千鈴はとまどいながらも、思う。

わたしは、ふつうにしていただけだ。菜種の真似ではなく……もつとも、真似したくてもできないのだから……、なにもできないけど、しかたなく、一条家の人たちといっしょの時間を過ごしていた。ただ、それだけだ。な

110

105

100

95

90

85

んなのって言いたいのは、わたしのほうだ。

わしゃわしゃわしゃ……と、全体が、大きなひとつのうねりのようになって、蟬が鳴いている。

「わたしも、菜種の気持ち、わかる」

そう言ったのは、姫乃だった。

「千鈴は、ずるい。ずるいことをしてないかもしれないけど、ずるい」

「(3) そんな、めちやくちやな。」

太陽がざらざらと照りつけている。

「だったら……」

千鈴は、姫乃のことを下から見上げるような目つきで言った。

「姫乃だって、ずるい。うちの家族を無視して、さんざんふり回してたくせに。今はリーダーぶって、トランプしてるんだってね」

「はあ？ バッカみたい。しかたなくやってるんだけど」

「だいたい、姫乃はなんで、うちのお父さんとお母さんのことを、おじさん、おばさん、って呼ぶのよ」

「気がついたの。わたしの親は、パパとママだけだから。あの人たちのこと、お父さん、お母さんなんて呼ばませーんって」

「あの人たちなんて言い方、しないでよ。わたしの、お父さんとお母さんなんだから。うちみんなが優しくしてくれるからって、えらそうにしないで」

「えらそうになんて、してないってば。トランプしてるのが、そんなに気に入らないの？ もー、嫉妬しないですよ」

「嫉妬?!」

その言葉にはじかれたように、千鈴は言い返す。

「嫉妬してるのは、姫乃でしょ！ 姫乃の言う、ずるいって、ルール違反やなにかでホントにずるいことをしたわけじゃなくて、自分の嫉妬の矛先を相手に向けて、ずるいって攻撃してるだけだよ」

そう口にしたとたん、蟬の声が、今度は、千鈴の側についたような空気がなった。

「そうだ、そのとおりだ。ずるくないのに、ずるい、と思う気持ちは、相手への嫉妬だ。」

千鈴は、自分で自分の言葉に、心の中でうなずいた。勢いのついた千鈴の口は、止まらない。

145

140

135

130

125

120

115

「ま、しょうがないよね。菜種が『門倉の娘』って言われてたら、そりゃあ、ムキになっちゃうよね。菜種は、あれだけ勉強ができて、あれだけ手伝いもできるんだもん。姫乃のパパとママが、菜種のほうを好きになっちゃうかもって思ったら、嫉妬もしちゃうよね」

わしゃわしゃわしゃ……。

蟬時雨は、大音声で降りそそいでいる。にもかかわらず、一瞬周りの音が消えた気がする。

千鈴は、瞬間的に「勝った」と思い、でもすぐ、その直後に「しまった」と思った。後悔の気持ちで、大きななにかのしかかる。ごめん、そうじゃない、そんなことあるわけない。あるわけないから、ただ言い負かすためだけに、言ってしまった。

千鈴がそのことに気づいたのと、姫乃が口を開いたのは、同時だった。

「たしかにね。パパとママは、勉強ができて、家事もできる菜種のほうが、わたしよりも、好きかもね」

「ちがう、そうじゃない……」

千鈴があわてて、言葉を並べ始めたとき。

「それは、ありえないよ」

菜種が、きっぱりとそう言った。

「あの人たちは、なにかができるとか、できないとか、そんなことで左右されるような人たちじゃない。見てれば、わかる。パパとママは、姫乃ちゃんのことが一番好きだよ」

姫乃は、驚いた顔で菜種を見た。

菜種は、どこか悲しい……というより、切ない表情をしている。

(4) 姫乃の表情は、とても複雑に動いた。最初は驚いて……、そして、いったん安心したような顔になったかと思うと……、今度は、不安そうな目で菜種を見て、おそろおそろ聞いた。

「菜種。わたしの代わりに、うちの子になりたくなかった？」

「さっきも言ったでしょ、バカなこと言わないでって。わたしは、今のまま、今の家で暮らしたいから」

三人とも、泣きそうな顔になっていた。

ミン、ミン、ミン、ミン、ミン……。

ツクツクオーシ、ツクツクオーシ、オーシツクツク、オーシツクツク……。

180

175

170

165

160

155

150

沈黙が流れ、蟬の音が、いよいよ大きく聞こえてきた。

(辻みゆき『家族セッション』)

問一

——(1)「三人はどうとう、よどんでいた気持ちをぶつけあうことになってしまった。」とありますが、本文全体を通して、次の(一)～(三)の問いに答えなさい。

(一)「姫乃」は「菜種」に対し、どのような思いをぶつけていますか。二行以内で説明しなさい。文末は「……こと。」や名詞で止めなくてよい。

(二)「菜種」は「千鈴」のことをどのように思っていますか。二行以内で説明しなさい。文末は「……こと。」や名詞で止めなくてよい。

(三)「千鈴」は「姫乃」に対し、どのような思いをどのように言いましたか。三行以内で説明しなさい。文末は「……こと。」や名詞で止めなくてよい。

問二

——(2)「耳が勝手に声を拾う。」とありますが、「耳」を使った慣用句、また「声」や「音」に関することわざなどについて、次の一～五のそれぞれの語に関する説明を、【語群】の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

- 一 耳が痛い 二 寝耳に水 三 産声を上げる
四 猫なで声 五 音を上げる

【語群】

- ア 人の機嫌を取ろうとする言い方。
イ いくら言っても効果がない。
ウ 弱点を指摘されてつらい。
エ 不意の出来事におどろく。
オ うれしくて声が生き生きする。
カ 新しい物事が作り出される。
キ 困難な状況に耐えられない。

問三

——(3)「そんな、めちやくちやな。」とありますが、このときの「千鈴」の心情として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分は一条家で過ごしたこれまでの時間は大切だと思っており、ずるいと言われても気にせずやってきたが、姫乃や菜種にまで言われるようになり、途方に暮れている。

イ 自分は一条家の家族や大地と仲よくすることを楽しいとは感じておらず、ずるいと言われるのは心外だったが、それ以上にこれまでの計画が挫折することに不安を抱いている。

ウ 自分は一条家で何か役に立ちたいと思っているのに結局何もできないので、ただ一緒の時間を過ごすだけなのだが、そのこと自体がずるいというのは心外で、困惑している。

エ 自分は一条家の家族になるために懸命に努力してきたことを褒めてもらいたいの、ずるいと非難されることに戸惑い、姫乃や菜種に対して苛立ちをあらわにしている。

問四

——(4)「姫乃の表情は、とても複雑に動いた。」とありますが、この時の「姫乃」の心情を説明したものと最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 千鈴の口から、「そうじゃない」と取り消そうとする言葉が出る瞬間、菜種から「それはありえないよ」という言葉を聞いたので、初めは驚いたが、菜種の悲しげな表情から「勝った」と思い安心する一方で、本当に門倉の娘になるのだろうかと不安にもなった。

イ 菜種の口から、門倉の父と母は姫乃のことが一番好きであると聞いて驚くとともに安心したが、同時に菜種のどこか悲しげな表情から、菜種は一条家で暮らすことが本当に嫌になったために門倉の娘になる決意をしてみたのではないかと不安にもなった。

ウ 千鈴の口から、姫乃は勉強も家事もできる菜種に嫉妬しているのだと言われて驚くが、菜種から門倉の父と母は姫乃のことが一番好きであると感じ安心する。しかし何でも見通せる菜種にはかなわないと思ひ、これからは菜種には逆らえないと不安になった。

エ 菜種の口から、門倉の父と母は能力で人を見ることをしない誠実な人たちであり、彼らは姫乃を一番大事にしていると聞いて驚くとともに安心したが、同時にそれだけ家族のことをよく見ている菜種が本当に門倉の娘になりたくなかったのかと不安になった。

問五

A D に入れる語としてふさわしいものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号はそれぞれ一回ずつ使用します。)

- ア ちよこちよこ イ どっしり ウ ありありと
エ まじまじと オ じりじりと カ おずおず
キ ぎっしりと ク ちらり、ちらりと

問六

本文では「蟬たちの声」や「蟬時雨」の描写が何度も出てきますが、そのことによる表現上の効果の説明としてふさわしくないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 66行目「わしゃわしゃとした蟬の声は、まるで姫乃の味方をするようにすごい迫力でせまってくる。」という描写から、菜種を挑発しようとする姫乃の攻撃的な態度が大きな脅威として感じられるように伝わってくる。

イ 94行目「蟬時雨の中の一匹が、ジッと鳴き終わり、別の一匹が、ミン……と、鳴き始める。」という描写から、三人のよどんでいた思いがぶつかる混乱した状況の中で、菜種の発した言葉に心から納得する千鈴の様子が伝わってくる。

ウ 153行目「蟬時雨は、大音声で降りそそいでいる。にもかかわらず、一瞬、周りの音が消えた気がする。」という描写から、周囲の音が聞こえなく感じるほどに、千鈴が姫乃を決定的に言い負かしてしまつた衝撃が伝わってくる。

エ 178行目「ミン、ミン、ミン、ミン、ミン……。ツクツクオーシ、ツクツクオーシ、オーシツクツク、オーシツクツク……。」という描写から、三人がそれぞれ思いをぶつけあつた後の沈黙がよくわかるとともに、大音声の蟬時雨の中にやり場のない思いが入っていくよう、途方に暮れる三人の様子がよく伝わってくる。

問七

次に示すのは、国語の授業で本文を読んだ後の先生の説明と、それに対してAさん、Dさんが感想を述べたものです。Aさん、Dさんの中で、明らかに本文の内容や特徴と合わない一人は誰ですか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

先生 この物語は、新生児すり替えという事件を発端に、当事者の少女三人がそれぞれ別の家庭で過ごしていく体験をする中で、お互いの家族や本人の複雑な思いが描かれています。皆さんはどう感じましたか。

ア Aさん 門倉家の娘になるかもしれない菜種は、本当は一条家でのまま暮らしたいと考えているので、姫乃からずいと言われてやりきれない気持ちだつたと思います。

イ Bさん 登場人物は千鈴、姫乃、菜種が中心ですが、千鈴の視点から語られています。従つて姫乃と菜種の心理は千鈴から見たものであり、千鈴の内面がより深く伝わってきます。

ウ Cさん 勢いが止まらなくなった千鈴は、姫乃を言い負かした後、すぐに言い過ぎたことを後悔しているので、千鈴は姫乃が嫌いになつたのではないことを理解しました。

エ Dさん この物語は千鈴、姫乃、菜種、それぞれの視点から、三者三様の描き方をしたもので、蟬時雨の効果とともに夏休みの雰囲気がいアルな形で伝わってきました。

